

ご存知ですか由来を、 他都市と違う函館の特異な慣習

中尾 仁彦

なぜ函館の葬儀は火葬が先におこなわれるのか

葬儀は、通夜、告別式、火葬の順番で実施されるのが一般的です。しかし函館では通夜の前に火葬が行われ、本州からの方が亡きがらを拝むことができずに憤慨した話を聞きます。何故そうなったかは①漁業の町函館では海難事故が多く、海水にさらされた遺体は腐敗しやすいためすぐに火葬。②北洋漁業の船員の親族が亡くなった際に、すぐに帰港できない船員のため先に火葬③戦争や昭和九年の函館大火、洞爺丸遭難などで多くの死者が出た際、衛生上の問題から葬儀を出す前に火葬。④戦後各町会館を利用して通夜・告別式を行う際に、遺体の搬入を拒んだため。⑤江戸時代から豪勢な冠婚葬祭で有名だった函館、戦後の新生活運動で、遺体を何日も置いておく手間やコストを省くため火葬を先に実施などの諸説がありますが、決定的となる根拠は不明です。函館のみならず近郊にも火葬が先である地域が若干あります。

火葬のみならず葬儀の習慣の違いはまだあり、①函館には遺族の大きな負担となる香典の「半返し」の制度はなく、香典の金額の大小に係わらず、香典返しは一律数百円程度の品物。②会葬礼状③領収書の三点が香典を受付で渡した後すぐに返されます。④弔問客はほとんど通夜のみで、告別式は近親者のみで実施。⑤最近幾分変化を生じていますが、葬儀は寺院や民間葬祭場を利用せず、低料金の町内会館を活発に利用。⑥新聞の死亡広告や葬儀委員長を立てるのが一般的ですが、本州では旧家や地位のある人などに限定されます。

ペリーによる日本最初の開港場として、西洋の物事を貪欲に取り入れたのは函館市民です。これらの気質が戦後の新生活運動において経済負担を少なくするため、いち早く取り入れた合理性の表れが異質な函館方式の葬儀を生んだと考えられます。

なぜ函館のお盆は七月なのか

「盆と正月がいつべんに来た」ということわざがあるように、昔からお盆は正月に並び立つ旧暦七月の中心行事でありました。お盆の前段階として、お墓や仏壇を掃除する清めの意味がある七日の七夕祭りから始まり、先祖の霊が家に戻る十三日は先祖の墓参りを行うお盆のメイン行事の初日です。十六日は京都の大文字焼きで有名な「送り火」をたき、霊を送り出す「灯ろう流し」が行われます。

明治五年、旧暦が新暦に改められた際、全国の大半は七月から八月（旧暦を新暦に直すとほぼ八月二十日前後）に移ります。函館も同様に八月に移りましたが、しかし八月は、四台の巨大な山車が出る最大のイベントである「函館八幡宮」の夏祭り時期と重なるため、同時実施は不可能。また正月が新暦なのにお盆が旧暦ではおかしいと市内の各寺院が協議し、大正六年から七月実施とすることで各檀家に通達したのが現在に至っているようです。一方には、東京以北最大の都市であった函館が東京に負けじと「いいふりこき」で七月に戻した説もあり、この説は当時の函館の高い経済力を如実に示したものです。

全国的にみても、七月お盆は東京の一部などに限られた少数派で、北海道では根室が七月です。函館と根室は豪商・高田屋嘉兵衛の影響を大きく受けた「先進地域」で、その後もロシアの影響を共に受け、同じ経済圏を構成したためと言われています。

※参考文献
函館市史
函館検定公式テキスト

箱館歴史散歩の会 中尾仁彦

第1回 函館検定 上級試験合格、西堀病院理事顧問。

現在「メディカルはこだて」で函館歴史散歩を連載中です。